

地が靈地たる所以を説き「我は比良明神也」といつて消えた。僧正は歸つてその由を言上した。天皇は御持佛の六寸の二臂如意輪觀音の金銅佛を良辨に授けられ、良辨はこの石山の山上に草庵を結び岩上にこの尊像を安置して祕法を修するに、幾ばくもなく陸奥國より黄金が獻上され年號が天平勝寶と改められた。祕法結願の日尊像を收めようとするや岩上を離れないので、更に奏聞して比良明神にこの地を乞い佛殿を建立したとかゝれている。

縁起は鎌倉時代に出来た繪卷物で美術史上國寶に指定されているが、その物語は當時の信仰から出来ている。

正倉院文書によると當寺の建立が東大寺大佛殿の造營に關連し、且良辨と深く結ばれていることが明かに知られる。大佛殿は未曾有の大建造物として着工されたが、その建築用材は近江の甲賀郡、高島郡方面の山から伐出して湖上に浮べ、瀬田川から筏で流して木津へ陸上げし、更に車で奈良に運搬された。石山の地はこれら用材の中繼集積所として石山院なる官衙が設けられ、輸送の事務や諸郡民の勞役のことが取扱われた。造東大寺別當は滋賀郡出身と傳えられる良辨であつた。彼は郷國石山院に大寺院を興すべく許可を得ている（上院務所縣石山寺文書）。その着工は正倉院文書では淳仁天皇の天平寶字五年（七六一年）十二月から翌六年七月迄に完成している。當時の建物は檜皮葺殿、六宇Ⅱ佛堂一字（長さ七丈、廣さ五丈高き一丈四尺）。經藏一字（長さ五丈、廣

さ一丈四尺、高一丈五尺）僧房四宇あり、板葺殿三宇で即ち經を寫す堂（長さ四丈、廣さ一丈八尺、高さ一丈六尺）法堂（長さ三丈、廣さ二丈、高一丈二尺）及食堂（長さ五丈、廣さ二丈、高一丈六尺）其他合せて十七宇に及び、丈六の觀世音菩薩の御掬像も神王二柱の御掬像も彩色目も覺むるばかりであつた。その費用は主として愛智・坂田・高島から便宜納入されたもので、所要人員は佛工・木工・土工・畫師・鐵工・仕丁人夫雜役等總計一萬三千人に及んでいる。この文書によつて創立當時の石山寺が如何なるものであつたかが明瞭である。一方經典の整備にも意を用い、鎮護國家の意味を以て盛に書寫された。大般若經は、天平寶字六年正月一萬三千餘張の紙を費して奉寫に着手し、十二月には同經二部千二百卷の用紙二萬四千餘張布六百餘端を所用としていることが古文書に見えている。かくて石山寺は東大寺直轄の寺院として政治と結合、急速、且壯大に輪奐の美を整えるに至つたものと思われる。

上代の石山寺

石山寺は創建以來朝野の崇敬厚く、桓武天皇は延暦二十三年（八〇四年）涅槃經を講讀する常樂會を行わせられ、爾來毎年の恒例とされた。梵唄舞曲の壯觀他に越ゆといわれ、その用途は近江國の租税が當てられ國衙在廳の官人參集の盛儀であつた。その後國郡の政治整わず租税の備は

次第に事缺くに至つたので、陽成天皇元慶年間より水田を各郡に置いてその地利を以て恒例の法要を維持されることとなつた。

創立當時東大寺の下に華嚴宗であつた石山寺は、弘法大師が眞言宗を輸入してその勢力が京都附近に振われるようになると、醍醐寺の開山で有名な聖寶によつて眞言宗に改められた。聖寶は東大寺でも東南院の開基となつた人で東大寺と關係深く、又一方醍醐寺を創立すると共に山を一つ越えて當寺に修業しこの石山にも勢力を發揮した。然し眞にその宗風を改め密教道場としての基礎を作つた開祖はその孫弟子の淳祐^{もろみ}であつた。彼は菅原道眞の孫で碩徳の譽高く、内供奉として宮廷にも信望厚く、宇多法皇は延喜十七年(九一七年)九月二十日と延長六年に當寺に御幸になつてゐる。石山寺が醍醐寺と同様に座主をおくことになつたのは、この淳祐内供の時からであつた。(石山寺座主傳記には聖寶を第一代にしている。)

俗塵を離れて奇巖靈泉、創立以來觀世音の靈驗に富む石山寺は絶佳なる四圍の風景と相俟つて、枚舉にいとまなき朝家雪宮^{あそみや}の歸依參詣參籠を見、詩歌に、小説に、日記に、紀行文に平安文學には數々の素材を提供してゐる。

藤原時代女流第一人者たる紫式部が、源氏物語の構想に當寺に七日間參籠して本堂にあつた料紙で源氏物語を綴つた有名な話も縁起にのせられており、落窪物語・更科日記・今昔物語・枕草

子・榮華物語・蜻蛉日記等々に或は夕月をたたえ、或は參籠に、紀行に、數々の記事をのせてゐる。

平安初期の信仰の道場が中期以後風流と享樂的氣韻のただよえる參籠へと移行してゐる處に、時代一般の姿を他の寺院より特に著しく觀察せしめる。是等の内に白河天皇承暦二年(一〇七八年)正月二日石山寺は焼亡してゐる。然し、幸にも本尊觀音は無事に移すことを得たと縁起は傳えてゐる。翌年その一部を再建したが、堂塔の整備復興は次の鎌倉時代になされたのである。

中世の石山寺

1、鎌倉時代 鎌倉時代は政治上に於て公家政治から武家政治への大變化を現したが、文化に於ても公家文化の中に武家文化が新なる發展を示した。當代に於ては公家の生活も時代の影響を受けて地味になり信仰は實際的な心を重んずる様になつた。かかる眞卒を尙ぶ信仰は庶民的精神に合致して石山寺の靈場は廣く一般の崇敬を浸透せしむるに至つてゐる。

石山寺縁起や年代記によると、建久元年(一一九〇年)中原親能が幕命によつて山城羽束の凶賊退治に當り毘沙門天の加護によつて目的を達したので、石山寺に勝南院を建て毘沙門天の尊像を安置し庄園を寄進したという。これによつて座主公深の門に親能の養子教源が入り、頼朝の懇志